

d 横穴式石室の成立と普及

一 横穴式石室と東アジア

横穴式石室は、墳丘内部に大小の石材を利用してつくられた横穴系の埋葬施設の一つで、石室内部は遺骸を収める玄室と、墳丘外部とを結ぶ羨道で構成される。

日本では古墳時代中期初頭の四世紀後葉に出現し、後期の六世紀代に入って普遍的に築造されるようになった。その原型は中国漢代に発達した横穴系墓室に求められ、朝鮮北部の高句麗で石室形式として定型化したものが、百済を経て伝来した。墓室内には複数遺体の追葬が可能で、夫婦や家族などの近親者を埋葬し、多数埋葬例では三〇体を超えるものもある。

横穴式石室に先行する古墳時代前期の古墳は一体の遺体を嚴重に埋葬する密封原理の豎穴系墓室が一般的であるから、開通原理の墓室の登場は墓制上の大転換であった。

日本の古墳総数はおよそ一〇〜一五万、その約八割ほどが六世紀以降の後期に属し、地域によって偏在性もあるが横穴式石室がその主要な埋葬施設となっている。その正確な数は分からないが、少なくとも六〜八万程度はつくられたと思われる。その点で横穴式石室は、古墳のなかでもっとも多くつくられた埋葬施設であろう。

柳 沢 一 男

日本に最初に横穴系墓室が出現したのは朝鮮半島に近接する九州中北部地方である。出現期の四世紀後葉から一世紀のあいだは九州中北部とごく一部の地域で築造されたにすぎないが、畿内地方での横穴式石室築造が本格化した六世紀に日本各地に波及し、古墳築造が衰退する七世紀後半末葉まで、多様な形式を生み出しながら継続して築造された。

日本における密閉原理の豎穴系墓室から横穴式石室への墓室転換は、近接する朝鮮諸国の動向とも密接に関連している。いち早く横穴式石室が普及した高句麗を除くと、漢城期百済が四世紀後葉、熊津期百済や旧馬韓（慕韓）は五世紀後葉、加耶が六世紀初頭、新羅は六世紀中葉以降に本格的な築造が始まる。地域によって多少の遅速はあるが、先行する豎穴系墓室から横穴系墓室への転換は、中国王朝の外縁地域ではほぼ同時に進行した現象であった。

二 横穴式石室の成立

日本に最初に横穴式石室が出現した九州地方では、玄界灘に面した北部域と有明海に面した中部域で独自の発展をとげた。北部の玄界灘沿岸域では、北部九州型と呼ぶ長方形プランと平天井構造の玄室をもつ横穴式石室が発達した。

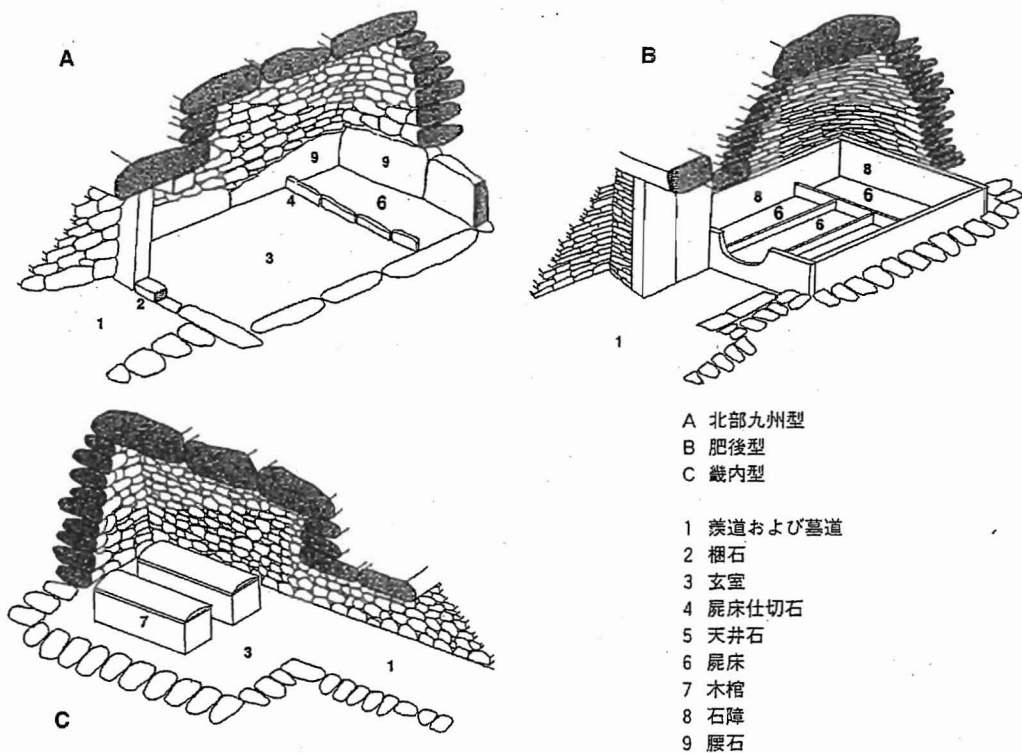


図1 横穴式石室の構造と名称 (初期横穴式石室)

北部九州型石室の形成

横穴式石室は、まず佐賀県唐津平野や福岡県糸島・福岡平野部の有力首長墳に導入が試みられた。最古と推測される横穴系墓室は、四世紀後葉の佐賀県谷口古墳(約八〇mの前方後円墳)の後円部上の方形壇内に二基が平列してつくられている。二つの石室とも割石積みみの合掌造り(東石室は、奥行き三m、幅一・六m、高さ二・二m)で、前方部側の短壁上部に出入り可能な入口部を設けた特異な墓室構造である。これにやや後れる福岡県老司古墳(七五mの前方後円墳)には後円部と前方部に大小二種類の四基の石室が築造されているが、後円部につくられた大型石室は合掌造りで前方部側の短壁を外方に突出させ、その上部から出入りする特殊な特殊な墓室構造である。これらの墓室は先行する縦穴系墓室の一部を改変したもので、横穴式石室としては未完成・不定型な特異形といふべきものであった。

これに後続する福岡県鋤崎古墳(六二mの前方後円墳)の横穴式石室は、割石小口積みで構築された奥行き三・六m、幅二・五〜二・七m、推定高二mの玄室と、前壁中央に狭小な羨道を接続した定型化した石室構造をもつ。鋤崎式は四世紀末葉にかけて九州北・中部の大大古墳(佐賀県横田下、長崎県黄金山、熊本県別当塚東古墳)に認められる。糸島地域を中心に型式整備が進められ、倭と朝鮮諸国との交渉に参画した首長層の墓制として採用された。

鋤崎式以後、石室構造は急速に変化し、五世紀初めには短小な割石積みみの羨道を立柱石配置に簡略化した釜塚式が出現する。中葉頃には玄室の壁体下部に大型石材を横位に据えた腰石を配置する奴山式、さらに後葉には腰石上部に塊石を使用する番塚式へと推移した。奴山式

段階には九州北部の首長層はほとんど横穴式石室を採用した。釜塚式までの石室は墳丘構築後に上部から掘削された大型墓壇内に構築されているが、奴山式の段階で墳丘築造過程のなかに石室構築が組み込まれ、墳丘の段築テラスに開口するように変化した。

一方、六世紀初めの関行丸式段階に持送り平天井構造が出現し、これに次ぐ王塚式では腰石の大型化と玄室空間の拡大が顕著となり、併せて石屋形や初現的な複室構造が取り入れられた。関行丸式以降の石室構造変化は後述する肥後型石室からの影響である。

北部九州型石室と豎穴系横穴式石室

五世紀前～中葉にかけて、北部九州型石室は首長墳に定着し、その影響下に中・小古墳にも横穴式石室の採用が急速に広まった。その構造は短壁の一方に出入り可能な開閉装置を設けた簡便なもので、豎穴系横穴式石室と呼んでいる。奥行き二・二～五m、幅〇・六～一m、高さ一m程度の小規模のものが一般的で、先行する豎穴系小石室を改変した構造である。他地域の間層の墓室が木棺や組合せ式石棺を主体とするのに対して、九州北部の間層が採用した墓室は著しく異なるものであった。

肥後型石室の形成

北部九州型が玄界灘沿岸域を中心に分布するのに対して、五世紀代の有明海東部地方には肥後型と呼ぶきわめて個性的な横穴式石室が出現した。

肥後型石室は玄室の方形プランとドーム状に高く持ち送る立面形を特徴とし、短小な羨道を接続するのが一般的である。また玄室の四壁に沿って板石の石障をめぐらせて屍床を区画し、石障や仕切石の表面

に、彫刻や彩色で円文や直弧文などの抽象的図文や盾・靱などの具象文を表現することが多い。

初現期の熊本県小島蔵一号墳は、持ち送り平天井構造で入口部は佐賀県谷口古墳のように前壁上部に設けられている。五世紀を前後する頃に北部九州型の鋤崎式に近似した短小な割石積み羨道を接続し、石室型として完成した。肥後型石室は五世紀中葉までに肥後地方全域に拡散したが、初期の石室は宇土半島南部の不知火海沿岸域に集中し、この地域首長層主導のもとに、導入と定型化が図られたことを示している。

五世紀後～末葉にかけて、羨道を前後に二分する複室構造の初現的な形態が出現した。六世紀前葉には玄室から独立した前室空間が確立し、複室構造として完成した。この墓室構造はただちに北部九州型のなかに取り込まれ、九州を代表する石室形式となった。複室構造の横穴式石室は、六世紀後葉以降、山陰・東海・関東地方などの地方形式にも採用され、地域的偏在性をみせながらも首長層の墓室形式として盛行することになった。

筑肥型石室と横穴式家形石棺

有明海北東部の筑後地方は北部九州型・肥後型石室が接触する地域で、両形式を折衷した筑肥型石室が出現した。肥後型の石障・屍床配置の属性と北部九州型の玄室平面形・天井構造の属性複合形式（A型）と、肥後型の玄室平面形・同天井構造の属性と、北部九州型の玄門・前庭構造の属性複合形式（B型）があり、この地域の首長層主導のもとに創案されたとみられる。

また同地方から肥後地方にかけて、横穴式石室の影響下に複数埋葬

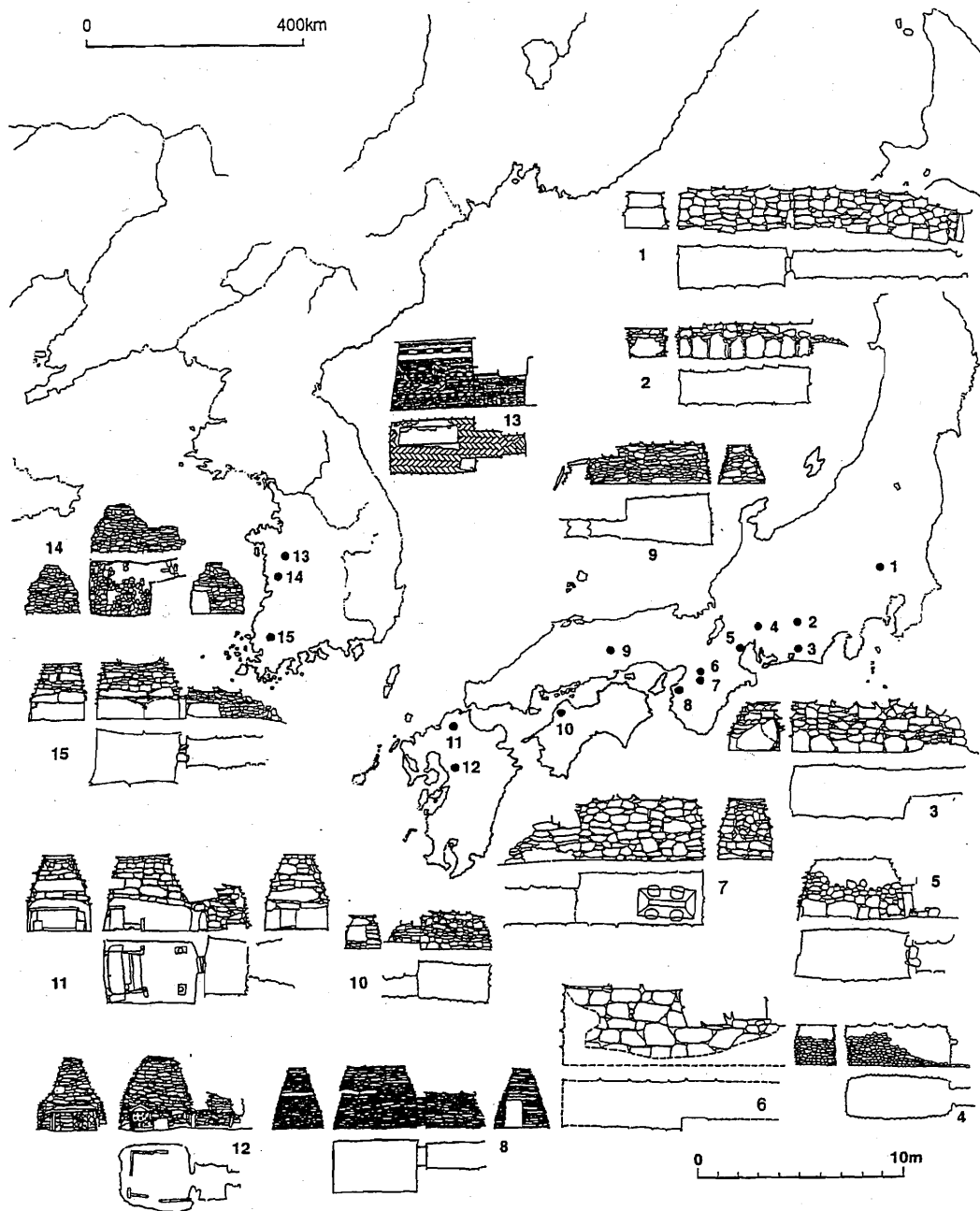


図2 6世紀初頭～前葉の倭と百済・全南地方の主な横穴式石室

- 1.群馬／前二子、2.長野／北本城、3.静岡／興覚寺後、4.岐阜／陽徳寺裏山1号、5.三重／井田川茶白山、6.奈良／東乗鞍、7.奈良／市尾墓山、8.和歌山／大谷山22号、9.岡山／中宮1号、10.愛媛／三島神社、11.福岡／桂川王塚、12.熊本／チブサン、13.忠南／宋山里6号（磚室）、14.全北／笠店里1号、15.全南／伏岩里3号

を可能とした大型の横口式家形石棺が成立した。肥後地方では江田船山古墳のように直接墳丘内に埋置するが、有明海北東部では福岡県石人山古墳のように鞘堂的な石室で覆うのが特徴である。この横口式家形石棺は五世紀前半から後葉にかけて有力首長層の古墳に共有され、有明海沿岸地域の地域首長連合を象徴する棺制として盛行した。

九州系横穴式石室の伝播

他地域に先駆けて出現した九州の横穴式石室は、列島の広域に横穴式石室が定着する以前に、西日本の諸地域に伝播した。その石室は北部九州型や肥後型の場合が少なく、有明海北東部で案出された筑肥型と、九州北部を中心とする豎穴系横穴式石室が中心となっている。

筑肥型の系統は岡山県干足、福井県向山一号、三重県おじよか、大阪府塔塚古墳などに、北部九州型は福井県西塚古墳に採用されているが、いずれも地域を代表する前方後円墳や大型の方・円墳である。豎穴系横穴式石室は、九州に接する山口県、日本海側の山陰・北陸地方、瀬戸内海沿岸、伊勢湾沿岸域へと広域に展開した。東海地方を除いて中小円墳に採用されることが多く、筑肥型や北部九州型を採用した古墳と顕著な階層性を示している。

このように、数百kmも離れた遠隔地に構造・形態的に近似する横穴式石室が出現した背景には、彼我の首長層間の密接な関係―婚姻関係や政治同盟関係―などに基づいて、造墓工人集団が派遣され築造されたことを示している。

畿内型石室の出現と形成

密閉原理の豎穴系墓室が卓越していた畿内では、大阪府塔塚や藤の森古墳のように五世紀中葉を前後して九州系石室が伝播したこともあ

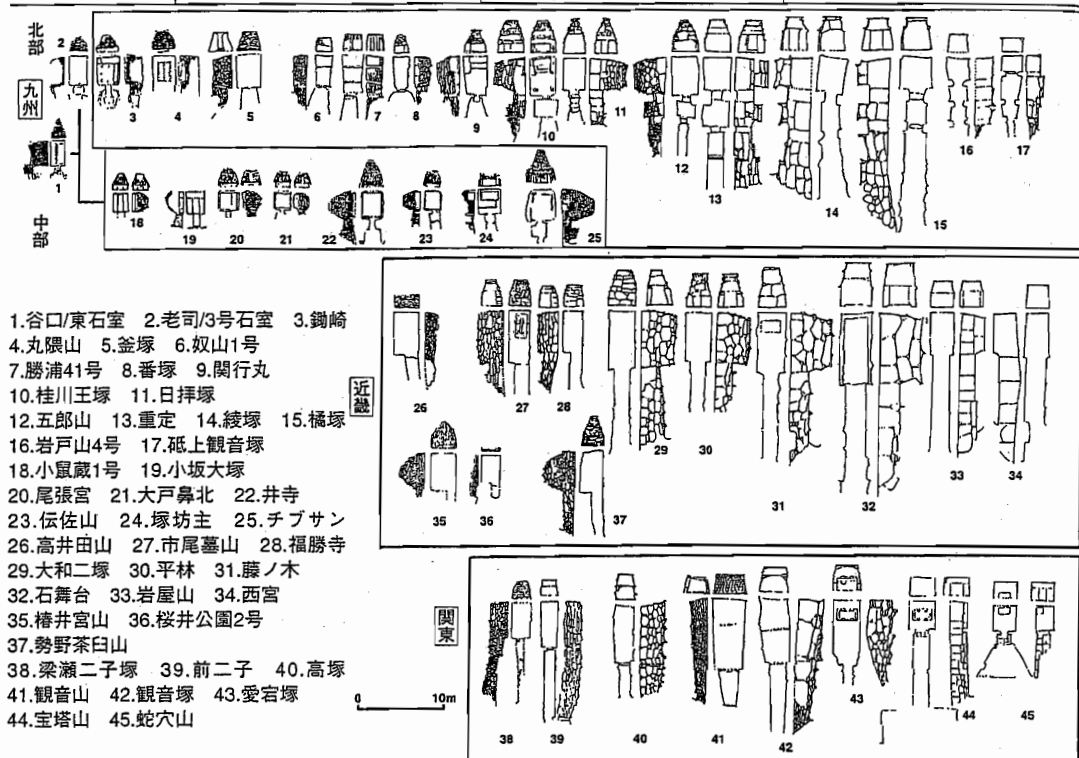
ったが定着しなかった。この地域に横穴式石室が本格的に築造され始めたのは、九州よりも一世紀ほど遅れた五世紀後葉のことである。

畿内の初現期を代表する大阪府高井田山古墳、奈良県宮山塚・桜井公園二号墳など横穴式石室は、扁平な割石ないし小型の塊石を使用し、築造され、長方形で左片袖型の玄室に短小な羨道を接続する特徴をもつ。玄室上部の詳細が分かる資料が多くないが、持ち送り平天井構造(高井田山古墳)と穹窿天井構造(宮山塚古墳)の二種があるらしい。

これらの横穴式石室の源流は百済の熊津期(四七五―五三八年)にたどることができ、前者が表井里型、後者は宋山里型に起源をもつ可能性が高い。倭王権中枢域への横穴式石室導入は、四七五年に高句麗の侵攻により王都(漢城)を失った百済に対する倭王権の支援に連動するものであろう。百済系渡来人や復興支援に参加して百済と密接な関係をもった中央首長層によって、横穴式石室の導入が積極的に促進されたのである。

六世紀に入ると出現期の二系列に加えて、平天井構造で玄室高が低い系列(市尾墓山古墳)と、大型石材を使用した持ち送り平天井構造の系列(東乗鞍古墳)が加わる。また大型石材の運用技術が飛躍的に発展する一方、六世紀中葉に両袖型石室が登場し、使用石材の大型化⇨壁体構成石材の減少と羨道の長大化が進行した。首長層の石室には組合式や刳抜式の家形石棺が取り入れられ、階層に準じて玄室の幅や規模に格差を設ける公葬的機能が付与されたらしく、上位層の横穴式石室は使用石材の大型化と石室規模の拡大が顕著になった。

中小墳の場合、古墳群によって多少の違いがあるが六世紀初〜中葉にかけて採用が拡がり、六世紀後葉以降、横穴式石室を取り入れた膨



- 1.谷口/東石室 2.老司/3号石室 3.鍋崎
 4.丸隈山 5.釜塚 6.奴山1号
 7.勝浦41号 8.番塚 9.関行丸
 10.桂川王塚 11.日拝塚
 12.五郎山 13.重定 14.綾塚 15.橘塚
 16.岩戸山4号 17.砥上観音塚
 18.小鼠蔵1号 19.小坂大塚
 20.尾張宮 21.大戸鼻北 22.井寺
 23.伝佐山 24.塚坊主 25.チブサン
 26.高井田山 27.市尾墓山 28.福勝寺
 29.大和二塚 30.平林 31.藤ノ木
 32.石舞台 33.岩屋山 34.西宮
 35.椿井宮山 36.桜井公園2号
 37.勢野茶臼山
 38.梁瀬二子塚 39.前二子 40.高塚
 41.観音山 42.観音塚 43.愛宕塚
 44.宝塔山 45.蛇穴山

図3 九州（北部・中部）、近畿、関東（群馬県）地方の大型横穴式石室の変遷

大な数の群集墳が築造された。

三 横穴式石室と食物供献儀礼

密閉原理の竪穴系埋葬施設から横穴式石室への転換は、単なる墓室構造の交代に留まるものでなかった。

五世紀後葉以降の横穴式石室には、死者に添える副葬品のほかに多量の須恵器・土師器の容器を墓室の内外に供献する儀礼が一般的となった。容器内に食物を実際に納めた例も多く、仮に空であったも食物を収めた容器と観念されていたらしい。飲食物を収めた容器副葬は、朝鮮半島の三韓時代の墳墓で一般的に認められる。こうした容器副葬は、横田下・黄金山古墳などの九州地方の初現期横穴式石室や渡来系集団の墳墓に容器副葬として認められるが、一般化する事はなかった。容器副葬⇨飲食物供献が広く行われるようになったのは畿内での横穴式石室出現以降で、横穴式石室の波及に伴って日本各地に広まった。

このことは、九州に横穴式石室が出現してから一世紀を経て、遺骸を嚴重に密閉し呪的な副葬品を配置した倭独自の墓制から、開通原理と食物供献を基調とする東アジア世界に共通する墓制へと、本格的に移行したことを示している。

四 横穴式石室の普及

畿内で横穴式石室が定着した六世紀初頭から前葉にかけて、その周縁地域の中国・四国から東海地方の首長墳を中心に、左片袖式の玄室と持ち送り平天井を特徴とする畿内型石室が出現した。奈良県

市尾墓山古墳の石室に近似する愛媛県三島神社・岡山県中宮一号墳、岐阜県二又一号墳、静岡県興覚寺後古墳などの石室は、畿内からの工人派遣によって築造されたものであろう。こうした首長層の採用を契機にして、中間層の中小墳にも急速に横穴式石室が拡大し、畿内型石室の広域波及は諸地域の墓制転換に大きな役割を果たした。

他方、九州系石室の遠隔地への直接的な伝播は少ないが、両袖式構造や玄門立柱石・柵石配置、玄室壁体下部の腰石設置などの特徴的な属性は、東海・北陸地方以西の諸地域の横穴式石室に大きな影響を与えた。

さらに六世紀を前後する時期には、九州系とも畿内系とも異なる形式の横穴式石室群がいくつかの地域に出現した。天竜川中流域の長野県飯田市周辺の多様な石室群、群馬県中西部の狭長な玄室をもつ石室群などである。これらの横穴式石室は複数の系統に分れるが、朝鮮半島中南部の加耶や、西南部の百濟・旧馬韓（慕韓）の横穴式石室に類例を求められるものもある。地方に定着した渡来系集団や彼我の首長層間の交渉のなかで導入されたものであろう。

このような六世紀に入ってから列島各地への急速な横穴式石室の波及は、五世紀前後に後葉にみられた九州系石室の遠隔地伝播と異なった歴史的背景が想定される。おそらくそれは、五世紀後葉以降に本格化する王権による地方支配の強化、百濟支援策への地方首長層の参加、渡来系集団の広域配置、墓室内への容器副葬―食物供献―という朝鮮諸国と共通する葬送観念の普及などの要素が複合し、横穴式石室の導入を促進したのであろう。

五 多様な地方形式の形成

六世紀に入って各地に普及した横穴式石室は、畿内・九州系や新来の朝鮮半島系石室をベースに展開した地方形式が成立し、それらが網の目状に混在する複雑な分布状況が現出した。地方形式の多くは、いち早く横穴式石室を導入した地域から二次的・三次的に波及して形成されたものであろう。地方形式にみられる多様性は、各地域が導入した石室モデルの系統差に加えて、在地化の過程で新たなアイデアが次々に付加され、とくに多様な石材に対応した地域色豊かな石室形式を創出したのである。

使用石材と対応する特徴的な地方形式をあげると、結晶片岩を積み上げて高い玄室空間を実現した和歌山県の岩橋型石室、凝灰岩を丁寧に加工して組み上げた石棺式石室（島根県東部・栃木県中央部）、大小の河原石を組み合わせて華麗な壁面を構成した模様積石室（群馬県南部・埼玉県北部）、片岩を用いた板石組石室（茨城県南部・千葉県北部）などは、その代表的なものである。これほどの特色をもたなくとも、ある一定領域に分布し、他地域の石室と区別される地域色豊かな石室形式は枚挙にいとまない。

こうした地方形式の石室分布範囲は、律令期の国の1/2程度の広がりをもつ島根県東部の石棺式石室や岩橋型石室から、狭小で1郡程度の分布域しかない徳島県の忌部型石室まで広狭さまざまである。多様な地方形式の分布域は、共通の石室形式を象徴とした氏族の結合関係や、より広域の擬制的な同族関係を示すものであろう。

なかでも最大の分布領域を示す畿内型石室の場合、多少の地域色を

含みながらも律令制の畿内の範圍とはほぼ重なり、支配的共同体としての一体性を象徴するとみることでもできる。

六 巨石積みから切石積み石室へ

横穴式石室が完全に定着した六世紀後七世紀前葉にかけて、首長墳級の大型横穴式石室は使用石材の巨石化と玄室空間の拡大が図られた。一石が五〇トンを超す巨石を使用するものも多く、玄室の平面積二〇〜三〇㎡、高さ四〜五mに達する大型石室が各地に登場した。なかでも福岡県橋塚・綾塚、岡山県牟佐大塚、香川県梶貸塚、奈良県見瀬丸山・石舞台、三重県高倉、群馬県観音塚などの横穴式石室はその代表例である。

六世紀後葉以降、横穴式石室は大王以下、各地の首長・中間層の共通する墓制として定着すると、上位階層は石室形式あるいは使用石材の規模や玄室空間の巨大性に、階層間の差別化を図ったのである。

また花崗岩などの硬質石材の加工技術が著しく発展した七世紀前葉以降、有力首長層は表面を平滑に加工した切石組みの精美な石室築造を指向する一方、玄室は高さの通減化と空間の縮小化に向かい、玄室壁面の一石化が顕著になった。奈良県岩屋山・西宮古墳、群馬県宝塔山・蛇穴山古墳などはその典型である。こうした丁寧な加工石材の使用や形態・構造変化は地方形式の横穴式石室でも認められ、列島全域に連動する動向であった。

律令制的な地方組織や人民編成が進行した七世紀後末葉になると、関東・東北地方の東国を除いて古墳の築造は急激に衰退した。同時に横穴式石室の規模も急激に小型化し、ようやく一体の遺体が埋葬でき

る程度の個人単葬墓へと変質した。

畿内では渡来系氏族や特定氏族・大王家に限って、横穴式石槨と呼ぶ精巧な小型墓室が盛んに築造された。しかしその規模はもはや追葬を可能とする空間のない個人墓となっており、容器副葬の風習も衰退した。

四世紀後葉に追葬可能な開通原理の墓室として登場した横穴式石室は、薄葬思想の進展と仏教思想の広まりのなかで家族墓という基本的役割を終え、終焉を迎えたのである。

参考文献

- 東 潮 一九九三「朝鮮三国時代における横穴式石室墳の成立と展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』第四七集
- 白石太一郎 一九八八「伊那谷の横穴式石室(一)(二)」『信濃』第四〇巻第七、八号
- 高木恭二 一九九四「石障系横穴式石室の成立と変遷」『宮嶋クリエイト』第六号、宮嶋学術文化振興財団
- 土生田純之 一九九一「横穴式石室からみた五、六世紀の日本」『日本横穴式石室の系譜』学生社
- 土生田純之 一九九四「畿内型石室の成立と伝播」『ヤマト王権と交流の諸相』古代王権と交流5 名著出版
- 増田一裕 一九九六「畿内大型横穴式石室の技術的展開」『日本考古学』第三号
- 右島和夫 一九八三「上野の初期横穴式石室の研究」『古文化談叢』第二二集
- 柳沢一男 一九九三「横穴式石室の導人と系譜」『季刊考古学』四五
- 山崎信二 一九八五「横穴式石室構造の地域別比較研究」中・四国編』『文部省科学研究費(一般C)研究報告書』
- 吉井秀夫 一九九九「日本のなかの百済」『特別展 百済』国立中央博物館(原文ハンゲル)